全農 JA全農いばらき

営農News

令和 6 年 1 月 9 日　第 3106 号

暑さに負けない！ 水稲の収量・品質向上をめざしましょう！

令和５年はこれまでにない暑い年となり、乳白粒などが多発し、水稲の農産物検査１等比率は大きく低下しました（特にコシヒカリ）。今年は十分な高温対策をたて、暑さに負けない「元気なイネづくり」で１等、多収をめざしましょう。

1. 作土はできるだけ深くしましょう！

作土の深さは、水稲にとって 15～20 ㎝が良いとされますが、最近は作業効率を良くするために、浅くなる傾向にあります。しかし、作土が浅い水田は根の張りが劣り養水分の吸収が悪くなり収量が低くなるとともに、高温年は乳白米や黒点米などが多発しやすくなります。そのため、作土は少しでも深くして、養水分を広範囲から吸えるようにすることが大事です。

深耕は秋にプラウで耕すと、ワラの分解が進み、地力を高める効果もあります。ロータリだけで耕すならば、耕深を深く設定し、作業速度を遅くして耕します。また、ほ場が乾いている時のほうが深くなります。

ただし、肥沃なほ場を深耕すると養分の吸収範囲が広くなり、生長量が多くなって倒伏が多くなる可能性がありますので、肥料を多く施用しないようにします。

2. 土壌中のりん酸、ケイ酸は十分に！　土壌診断で確かめましょう。

ケイ酸が少ないと光合成能力が低下したり、水分不足になりやすく、高温年には乳白粒や黒点米などが多発します。また、病気や害虫に弱くなります。りん酸が少ないと生育が劣り、分げつや穂が少なくなって減収します。

水田土壌中にリン酸、ケイ酸がどのくらいあるか、土壌診断で確かめましょう。りん酸の基準は乾土 100ｇあたり 10～30 ㎎で、ケイ酸は 30～40 ㎎です。基準値より低い場合は「ようりん」「苦土重焼燐」「シリカサポート１号」「農力アップ」などを施用します。

3. 肥料は適期に施用する！

チッソ肥料が不足すると生育が劣り、収量は低下し乳白粒などが多くなります。特に基肥―穂肥体系では、穂肥（チッソ）が少ないと光合成能力が低下して乳白粒などが多くなります。最近は温暖化の影響により、出穂期や成熟期が早まる傾向にあります。コシヒカリの適切な穂肥施用時期は出穂期の 15 日から 10 日前ですので、幼穂長などから出穂期を予想し、適期に追肥を行いましょう。

また、「コシ一発かんた君」などの全量基肥肥料の施用は、「田植えの 2 週間前から代かき前」が適期です。施用時期が早すぎると、緩効性窒素の供給がイネの生育に合わなくなり、収量や品質が悪くなる可能性があります。適期施用を心がけましょう。

4. 細心の水管理を！　根の活力を保ちつつイネの水不足に注意する。

田植え後 40 日ころから中干しを 5～10 日程度行います。このことにより過剰分げつを抑え、根の活力を維持することができ、乳白粒などの多発を抑えることができます。　その後は湛水と落水を交互に行う間断かんがいを行います。特に出穂後は、水田の土が少しでも見えたらすぐに水を入れます。水田が乾いてイネが水不足になると乳白粒などが多くなりますので、水管理には細心の注意を払います。

5.　堆肥の施用を考える。

最近「イネの緑の色が薄くなった」「収量が下がっている」毎年乳白粒などが多く等級が低い」。そのような水田は地力が低下していることが考えられ、堆肥の施用が有効と考えられます。堆肥から出るチッソにより光合成能力が高くなり、乳白粒などの発生が少なくなるとともに収量が増加する効果があります。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
■ 営農 News はＪＡ全農いばらきホームページでもご覧になれます。

農機営農支援部　営農支援課　　電話：029-291-1012　FAX：029-291-1040